親父に教わった100の考え方 その7

一『押』二『金』三『姿』四『程』五『芸』

高校1年生の頃、10キロ近くの道のりを自転車で通学していた。大雪のある日、親父が車で送ってくれた。

ハンドルを握りながら親父は、「お父ちゃんこう見えて、もてるんやぞ。女の子にもてるのはどうしたらええかわかるか？」と話し出した。へぇと、興味を持った私に、「まずは「一『押』二『金』三『姿』四『程』五『芸』やぞ」と話は続く。「好きになったら、まずは押して押して押しまくれ。次に稼げ。お前はまだ高校生やから稼ぐというより女性に缶コーヒーでもいいから何かをプレゼントせぇ。喫茶店で割り勘はするなよ。三の『姿』は、お父ちゃんの子やからあきらめろ。ま、3の条件やから大したことはない。うちの家は決して裕福ではないが、四の『程』はお前が勉強して社会的地位を作れ。五の『芸』は面白さや。友達との会話聞いてると、お前はなんとか大丈夫やろ」。思いがけない父と息子のドライブは佳境に…。

すると、親父がぽつり。「愛とお金どっちが大切かと聞かれたらお父ちゃんは愛やな」。「お金があったら女の子にもてるやん」と言う私。親父は「もし、お前が将来金持ちになっててまだ独身だったら、自分の魅力に惚れてくれんじゃなく、お金に惚れたんかと自問自答するぞ。そんなん悲しいと思わへんか？」

高校生の私には、その意味が分からなかった。車が高校に到着する直前、「頭のええ人選びや。なんでか言うたら尊敬できるからな。見た目や、姿形は月日とともに劣るけど、尊敬は月日と関係ない」

「もひとつ言うとく。せっかくお前を好きになってくれた女の子でも、お前が尊敬される人にならないと女の子は離れていくぞ」。

雪道の車内での親子の会話は、窓外の雪に覆われた景色に比して、熱気に満ちていた。

このたった30分。されど、私の人生にとっての貴重な時間だったことは間違いない。

大東市　潤吉